

## 脱線としてのディアドコス

佐原浩一郎

小林先生は、わたし以外の人物との会話のなかで、わたしのことを弟子と呼びます。このとき弟子という語は、知識を伝授される者という一般的な意味とともに、落語家の師弟関係において見られるような意味を担わされているとも思われます。そのように注記しなければならないほど、わたしは小林先生と多くの時間を共に過ごしました。だからといって、わたしは落語家の弟子のように彼の身の回りの世話をしていたのではなく、あたかもある種の「友のように」（おそらくは、彼の愛猫の名が指すものをめぐるゲームのように）、研究室や21号線沿いのココスなどで昼夜問わず会話に明け暮れていたに過ぎません。それゆえ、もしかすると、わたしは彼からもろもろの学説や教義などを受け継いでいるわけではないのかもしれませんが。そうすると、わたしは従属的な弟子一般としてのélèveでもなければ、disciplineの継承者としてのdiscipleでもないということになります。そして、このような弟子の定義から離れれば離れるほど、それにもかかわらず、わたしは自らを、彼の何らかの継承者、何らかの  $\Delta \iota \acute{\alpha} \delta \omicron \chi \omicron \varsigma$ （ディアドコス）として見いださなければならないように思われてなりません。

小林先生のディスクールの特性としては、以下の三点が挙げられるでしょう。第一に、視点の多数性。ここで、問題化されているひとつの曖昧なものは、多数の視点から論じられますが、このことは、その

曖昧なものを客観的に同一化するためであるというよりは、むしろその曖昧なものが何らかの同一性に抗う力を有していることを知らせるためであるように思われます。第二に、ひとつの概念の諸内包の超限的探索。何らかの命題が言明されたとします。このとき、小林先生はこの命題を構成するもろもろの語の定義に取りかかり、おのおのの語の用例に言及し、そこから必然的に、そうした説明と連鎖することのできる新たな諸命題を呼び寄せることとなります。このような操作のなかには、ひとつの概念のなかの、その概念に固有のものとは別のものとの戯れが見られます。第三に、遷移への志向性。諸視点（あるいは諸概念、諸命題）の一方から他方へ移るとき、わたしたちはひとつの決定不可能性に身を投じなければなりません。小林先生がディスクールを「脱線」させて止まないのには、「反 - 排中律」の場としてのそのような遷移を数多く表面化させる以外の理由があるようには思われません。

以上のことは、厳密に言えば、継承という語が帯びる水平的な連絡を介して一方から他方へ引き渡されるようなものではなく、継承それ自体の成立要件とでも言うべきものです。言い換えるなら、何らかのものを継承するのではなく、継承というひとつの出来事に一致するということ、あるいは、継承者ではなく、継承それ自体であるということが、継承者を新たな手法で意味することになるということ、さらに、そうした点に送り返されることなくして、何らかの関係性に由来するひとつの症状（弟子であるにせよ、友であるにせよ）がいかなるものであるかをうまく診断することはできないということ。

さはら こういちろう

哲学研究者。フランス哲学（ドゥルーズ）、西洋哲学史、美学を専門とする。近年のテーマは、ドゥルーズ哲学の全体においてライブニッツの諸理論がどのように位置づけられているかというもの。情報科学芸術大学院大学修了。大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。主な論文に「ドゥルーズにとってのライブニッツ主義」（博士論文、2022）、「非共可能性と最良の世界」（共生学ジャーナル、2021）など。

